図書館部報

岡崎市現職研修委員会
学 校 図 書 館 部
平成２７年１２月１５日
No. ３

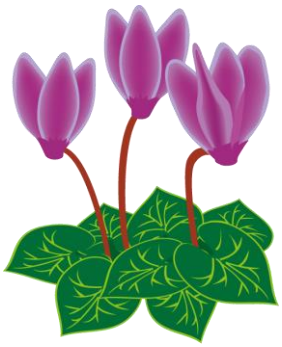
「いつだって、読書日和」

岡崎市現職研修委員会学校図書館部
部長　　豊富小学校　山口　明則

すでに終わってしまいましたが、今年の読書週間（１０月２７日～１１月９日）の標語が、タイトルに記した「いつだって、読書日和」でした。ちょっとほんわかとした、すてきな標語だなと思いました。そこでこの標語に引かれて、読書週間を主催する読書推進運動協議会のウェブページを見ましたら、次のような文がありました。

「終戦まもない１９４７年（昭和２２）年、（中略）第１回『読書週間』が開催されました。そのときの反響はすばらしく、（中略）そして『読書週間』は、日本の国民的行事として定着し、日本は世界有数の『本を読む国民の国』になりました。」

日本人が読書週間という活動を通してたくさん本を読む国民になっていったということですが、さらに歴代の読書週間の主な標語を調べていくと……。



１９４７年　第 １回　「楽しく読んで　明るく生きよう」
１９４９年　第 ３回　「おくりものには　よい本を」
１９５４年　第 ８回　「みんなで　本を　読みましょう」
１９５６年　第 10 回　「読書がつくる　よい家庭」
１９６１年　第 15 回　「あかるい社会　たのしい読書」
１９７０年　第 24 回　「茶の間に雑誌　明るい家庭」
１９７３年　第 27 回　「レジャーを本で」

戦後の混乱を乗り越えて本を広く社会に広めようというスタートから、徐々に本が普及し、生活を豊かにするためのものとして位置づけられてきた日本社会の発展ぶりが、この標語からも垣間見ることができます。

そして時代はさらに進み、戦後７０年目となる今年の読書推進運動協議会のウェブページには、次のような文が先の引用文に続いて書かれています。

「いま、電子メディアの発達によって、世界の情報伝達の流れは、大きく変容しようとしています。しかし、その使い手が人間であるかぎり、その本体の人間性を育て、かたちづくるのに、『本』が重要な役割を果たすことはかわりありません。暮らしのスタイルに、人生設計のなかに、新しい感覚での『本とのつきあい方』をとりいれていきませんか。」

この先、どのように、私たちは、子供たちは、本とつきあっていくのでしょうか。電車の中でも、文庫本や新聞・雑誌を持つ人よりもスマートフォン等に見入る若者が圧倒的に多い今日です。ゲームをしているのではなく、新しい感覚で電子書籍を高校生や大学生などの若者が読んでいてくれるのだと信じています。いつだって、読書日和なのですから。